

蹴上 山科北西

田辺朔郎が発案し推進した、明治時代の大事業「琵琶湖疏水」が蹴上から山科にかけて今も山治いに流れ、その偉業を見ることができます。また、この地域は近江から京への交通の要所でもあり、古くは中臣(藤原)氏の基盤の地でもあることから、歴史的にも独自の遺跡や伝承が残されています。琵琶湖疏水の事業を学習できる蹴上から山科北西地域を巡り、当地の歴史の痕跡を見て歩くコースとしています。



史跡 琵琶湖疏水

琵琶湖疏水は、明治維新による東京奠都(てんと)で衰微した京都の活性化のため、田辺朔郎(さくろう)を設計監督として、第三代府知事・北垣国道が主導して1885年より建設された水路です。堅坑(たてこう)方式でのトンネル掘削技術を用いた一大事業で、灌漑、水運、水車動力、上水道利用、水力発電で市電を走らせる等、京都の近代化を促進しました。現在でも農業や防火用水、水力発電、上水道など多目的に活用されています。インクラインや水路閘の他、第1〜第3トンネルの各出入口、日本初の鉄筋コンクリート橋(日ノ岡第11号橋)やコンクリートアーチ橋(山ノ谷橋)など全12箇所が国の史跡に指定されています。また各トンネル出入口の門にはそれぞれ意匠が施され、著名人筆の扁額(へんがく)が掲げられています。

1 ねじりまんぼ

正しくは「斜拱渠(しゃきょうきょ)」といい、上部の道に対し斜めに交差するトンネルの強度を上げるため煉瓦を螺旋状に積み上げています。「まんぼ(間歩)」は線路をくぐるトンネルのことで、それがねじられているため「ねじりまんぼ」と称されました。



2 蹴上発電所

1888年に田辺朔郎と高木文平が渡米調査して、疏水計画をそれまでの工業用水利用から水力発電活用に転換して建設した日本初の水力発電所。市電運行やインクラインの電力供給に役立ちました。



3 琵琶湖疏水記念館

琵琶湖疏水竣工100周年記念として開館。建設当時の図や資料、発電所で使用された水車などが展示されています。地階から外(南禅寺境内側)へ出てインクライン上を歩くことができます。(入館無料)



4 史跡 蹴上インクライン

水力発電用に高低差が約36mある区間を通船させるため、設置された傾斜鉄道。舟運の衰退に伴って役目を終え、現在は復原された台車や三十石船とともに保存されています。(国指定史跡)



日向大神宮(市文化財環境保全地区)
「京のお伊勢さん」ともよばれ、東海道の旅の安全を祈願する旅人に信仰された神社。伊勢参りを近隣地に求め、伊勢神宮の模倣社が造られたのではといわれています。社殿は伊勢神宮に模した内宮と外宮に分かれる神明造で、市登録有形文化財です。多くの境内社があり、縁結びや厄除けなどのご利益でも知られる紅葉の名所です。

本國寺
1253年、日蓮上人創建の法華堂が起源。1971年に堀川六条から山科へ移転しました。加藤清正や水戸光圀、豊臣秀吉の姉・日秀尼らとゆかりがあることでも知られています。

仁王門
天智天皇山科陵
中臣鎌足(藤原鎌足)と共に大化の改新(645)を主導した中大兄皇子(天智天皇)の陵墓。「御陵(みささぎ)」の地名は、この陵墓の存在に由来します。

第三トンネル西口

第三トンネル東口

第二トンネル西口

第二トンネル東口

日向大神宮

日向大神宮

日向大神宮

日向大神宮

日向大神宮

日向大神宮

日向大神宮

日向大神宮

日向大神宮

日向大神宮

日向大神宮

日向大神宮

地名の由来

- 蹴上(けあげ)**
奥州平泉へ向かう源義経が、泥水を蹴り上げた武將を斬ったことが由来といわれます。なお、「蹴上」という住所表記はなく、周辺一帯の地域を指す名称です。
- 日ノ岡(ひのおか)**
周囲を山に囲まれ、東南のみが開けて朝陽(日)が差し込む岡であることに由来しています。
- 御陵(みささぎ)**
天智天皇 山科陵の存在に由来します。
- 厨子奥(ずしおく)**
渋谷街道に関わる辻(交差点)の奥、または「辻子(すし)」(街道の住民)にちなんだ地名といわれます。

京都市国際交流会館
1989年に開館した京都市の国際交流の拠点。イベントホールなど様々な施設があり、京都在住の外国人向けの情報サービス提供や市民と留学生らの交流イベントなどを開催しています。

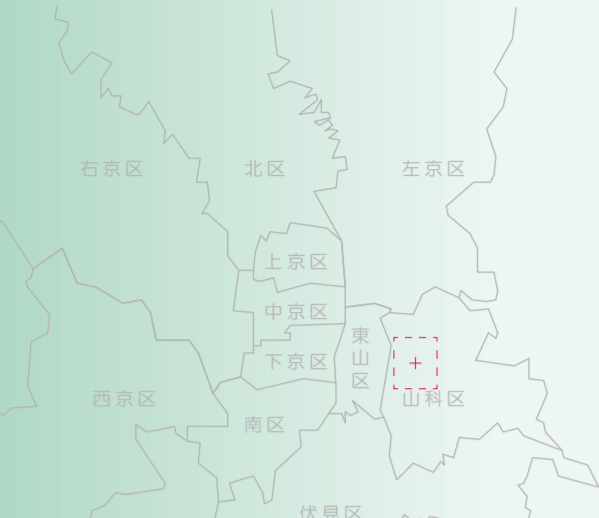
義経大日如来
源義経が奥州旅立ちの折、殺した武將を弔い、九体の地藏を街道に立てた伝承が残り、そのうちの一体といわれます。

境内の酔芙蓉
大乗寺
江戸時代創建の尼寺で、1981年に上京区から山科へ移転。「酔芙蓉の寺」として知られ、9月下旬〜10月中旬が見頃です。

琵琶湖疏水煉瓦工場跡石碑
琵琶湖疏水工事に使用する煉瓦を自給し、1889年の閉鎖まで1370万個を製造した工場跡碑。

元慶寺
877年、陽成天皇誕生に際して僧正遍昭を開基とし、天皇の母藤原高子が発願、建立。応仁の乱などで焼失後、江戸時代に再建された現在の建物には、遍昭作と伝わる木像などがあります。

蹴上山科北西



～文化財と遺跡を歩く～ 京都歴史散策マップ



発行 京都市・(財)京都市埋蔵文化財研究所

蹴上山科北西周辺の発掘調査

蹴上山科北西は京都の東南部にあたります。明治二十三年(1890)に完成した史跡琵琶湖第一疏水は「山科疏水」とも呼ばれ琵琶湖から山科北部を蛇行し、蹴上へと続いています。また、疏水の南には近江から東国へ向う旧東海道(三条街道)が通り、蹴上付近は平安時代以後、京の東の玄関口として、交通の要衝でもありました。周辺の遺跡には JR 山科駅南側一帯には縄文時代から鎌倉時代の集落跡である安朱(あんしゅ)遺跡が広がっています。発掘調査では飛鳥時代から鎌倉時代の集落跡や平安時代の墓も発見されました。その北側には平安時代前期に建立された安祥寺下寺跡が、山中には安祥寺上寺跡があります。また、飛鳥時代の須恵器窯跡や製鉄遺跡などの窯業遺跡が東山山麓から天智天皇陵周辺にかけて点在しており、山科窯跡群とよばれています。天皇陵南西にあたる日ノ岡堤谷窯跡では、山科窯跡群としては初めてとなる発掘調査が行われ、時代や窯の様子が明らかになりました。

※表紙の写真は1996年に史跡となった蹴上インクラインです。

① 日ノ岡堤谷窯跡(飛鳥時代)

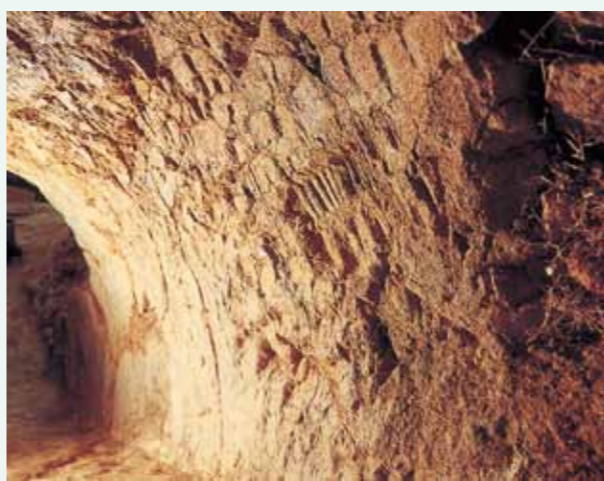
1995年に発掘調査された須恵器の窯跡です。窯は丘陵斜面の岩盤をトンネル状に掘り抜いてつくられた穴窯とよばれるものです。全長は約7mあり、天井部もほぼ崩れておらず、トンネル状のまま地中に埋もれていました。窯の内部は掘り抜いた際に使用された工具の痕跡や補修した粘土もみられました。窯跡前面の灰原からは多量の炭や焼土に混じって、多くの焼き損じた須恵器片が出土しました。須恵器の型式や種類から窯の操業年代が7世紀の前半から中頃までであることが明らかになりました。また、出土した須恵器にはコンパス文を描いたものやヘラで文字を刻んだものも出土しています。



須恵器を焼いた穴窯跡(飛鳥時代)



天井部を除いた窯跡内部の様子



窯跡内部の側壁に残る工具の跡



窯跡内部を粘土で補修した箇所



コンパス文がある須恵器

文字が刻まれた須恵器

② 安祥寺上寺跡(平安時代)

安祥寺は、嘉祥元年(848)に、文徳天皇の母、藤原順子(のぶこ)の発願により、入唐僧惠運(えうん)により創建されました。安祥寺は上寺と下寺に分かれ、上寺の遺跡はJR山科駅の北側にある安祥寺山の中腹、標高約320m付近の平坦地に残っています。これまでの分布調査で平坦面や建物の基礎跡などが確認されています。安祥寺は、府立洛東高校の西隣に法灯を今に伝えています。



安祥寺山の中腹に残存する土塁跡



安祥寺上寺の建物があったとみられる平坦地



安祥寺上寺跡に残る礎石



安祥寺山中腹の斜面に散在する石材



安祥寺上寺の想像復原図 礎石や基礎跡などから作図(梶川敏夫氏)

③ 安朱遺跡(縄文時代～鎌倉時代)

1993年～1995年にかけて京阪電気鉄道山科駅の南側で再開発にともなう発掘調査が行われました。この辺りが安祥寺下寺の南端と推定されています。調査では、縄文時代から鎌倉時代の集落跡と墓が発見され、地名から「安朱遺跡」と名付けられました。1993年には奈良時代の建物跡と平安時代前期の「木炭木郭墓」という木棺の周囲に木炭をつめた特殊な墓や平安時代中期から後期の墓なども見つかりました。木炭木郭墓の中からは白銅鏡、乾漆製品、銅銭など重要な遺物も見つかりました。この墓はそのまま地面から切り取り保存処理され、現在、伏見区淀水垂町の水垂収蔵庫に保管・展示公開されています。1994年の調査では縄文時代の環状墓、飛鳥時代の竪穴住居跡、奈良時代から平安時代の建物跡が発見されました。1995年の調査では平安時代中期の墓が発見され、中から多くの土師器の皿と銅銭が見つかりました。



発掘調査の様子



環状墓(縄文時代)



竪穴住居跡(飛鳥時代)



木棺の周囲に木炭をつめた木炭木郭墓(平安時代前期)



木炭木郭墓の副葬品(平安時代前期)



土師器皿や銅銭が副葬された墓跡(平安時代中期)



墓跡から出土した銅銭(平安時代中期)



石で囲まれた墓跡(平安時代後期)

